



妙たえの光ひかり

復刊122号

終活、私の願い

新潟市西蒲区

石田辰二さん(84歳)

今から数十年前、我が家の本家に「千葉日報政治部長石田某」の名刺を携えた訪問客の一行がありました。戸籍で先祖の系譜をたどったけれど、戸籍法の施行は明治4年です。訪問当時に130年前まではわかったけれど、それ以上遡ることはできなかったというのです。本家のご主人から相談を受けて共にお寺を尋ね、現院首様に過去帳を調べていただいたところ、江戸中期に出た分家であることが分りました。

その後一行と共に推定約400年前余りに立てられた本家のお墓にお参りして、皆さんとても満足して千葉に帰って行かれました。お墓はお逢いすることのできないご先祖様や、憧れの歴史上の人物たちとの邂逅かいごの場でもあると思います。

浄土講座を拜聴して納得を深めたのは、お墓参りはそれぞれの心の中で生き続けている今は亡き親族・姻族・朋友たちとの再会の場であるとお話でした。その一方で、人の死が商業主義に乗せられて金儲けの手段にされかねない浮世の中で、終活をどのようにまとめしていくのか思案にまわっています。(2ページに続く)

*昨年11月の浄土講座「終活事情の裏表」に参加された際の感想文を、石田さんの了解を得て再構成し掲載しました。



行事案内



かいさんえ

『おてらの日 妙光寺開山会』

5月27日(土) 午前9時半開門

江戸時代から続く春の伝統行事「ご判さま」と、夏の「送り盆」(フェスティバル安穩)の一部が一つになります。新緑の季節に『開山会』として新たなスタートです。法要、稚児行列、水行、出店、相談コーナーなど盛りだくさん。午後からは岩屋で舞とお経、太鼓による「七面天女物語」もあります。ご家族、お友達、皆さんでご参加ください。※詳細は開山会パンフレットをご覧ください。



ちこ

お稚児さん募集

5月27日(土) 9時~12時

上記『開山会』にあわせ、法要に出仕していただくお稚児さんを募集します。古式ゆかしい衣裳を着けてのお練りなど、子どもたちにとっても貴重な体験となります。

5歳~7歳くらいまでの男女児10名
■参加費6千円
※詳細は開山会パンフレット裏面をごらんください。



月例信行会

毎月第1水曜日 午前9時~11時

4月から曜日と時間帯が変わります!

●4月5日(水) ●5月3日(水) ●6月7日(水) ●7月5日(水)
お参り、法話、作務、コーヒータイトム等があり、交流の輪も広がります。

■参加費 お志を各自賽銭箱にお願いします
予約申込み不用。当日直接お寺へお越し下さい。

ボランティア

毎月15日

●午前9時~11時半 午後1時~3時

堂内や境内の清掃等をお願いしています。都合の良い時間にお越し下さい。一日可能な方は昼食のご持参をお願いします。

春を告げる花々

雪国の冬もようやく終わり、お寺周辺ではこれから一斉に春の花が咲き始めます。どうぞ足をお運びください。



あどがき

妙光寺も春を迎えています。今春はお寺のメンバーも入れ替わり、『開山会』をはじめ新しい行事に取り組む春になります。ご前様を先頭に皆で「安穩の世界」を求めていきます。どうぞお参りにおいでください。(新倉理恵子)

※新型コロナウイルス感染拡大状況によっては、すべての行事において内容を変更する場合があります。ご了承ください。

新潟市西蒲区 石田辰二さん

孝養

私の終活の悩みは、先祖辰左衛門以来築いてきた我が家の価値観を、どのようにして倅に受け継がせるかということです。私が伝えたい遺産相続を遺言状に自身で書くことは経験上できません。しかし私のこうした価値観が子どもたちにとつて受け入れがたく、腹立たしいものと思われるかもしれないと感じています。でもそうしないと我が胸中に生きる父や祖父、曾祖父が納得しないでしょう。

屋敷を菜畑にするな、田畑を死守せよ、代々守ってきた日蓮宗の仏壇を、法灯を守れ、墓守を捨ててはならぬ、それらが守れぬものは親不孝である。人として親不孝ほどアンモラルなことはない。

これらを受け継ぎ次代に繋ぐことを親父、お袋等から脳にすり込まれてきた私は、その信仰とも言える我が家の理念を倅に伝える暇もなく子どもを世間に手放してしまいました。痛恨の極みです。本来「孝養」というものは親が

子に強いものではありません。子どもたちが長い人生の中で会得するべく育てるのが親というものであり、ろろと考えます。しかし我が子どもたちは「孝」という言葉すら知らないと思います。親父としてはそれが切なくて哀しいのです。

倅への思い

大学院まで出した倅は県外の大企業に勤め、東京で出会った女性と結婚して子どもが生まれ、東京の都心に一戸建てを建てて立派に家庭を営み、親として何の心配もありません。せめて定年後は故郷に戻り、家と田畑を守って欲しいのです。それが親父の願いです。

さらにお墓の維持、菩提寺存続の出費を負担だと思ってもらいたくはありません。自分を育ててくれた父祖伝来が心を安んじてきた堂塔です。確かに信仰の自由は憲法に保障された基本的人権の大きなひとつです。倅よ、あなたに無理に仏教徒になれとは言いません。しかし父や母、祖父や祖母が守ってきた寺院やお墓を死ぬまで維持



家の前の田んぼを眺める石田さん

管理することは人としての義務です。親が子を産み子どもが自立できるまで育てる義務があるのと同じように、この世からいなくなった親たちの魂の安寧に、人生の一部の時間を供すること、さらに子どもたちにそのことの意義を受け継がせることは、人としての義務であると私は考えます。

仏教に教えを乞う

仏教、カトリック、プロテスタ

ント、ピューリタン、回教、大きな宗教はいずれもお墓を作り、縁者が守っています。西洋の哲学者は「万物は流転する」と言いました。仏教は人生無常ととらえています。留まることのない現世の世の中で、私は倅に辰左衛門家の永久を求め手掛かりを院首様に授かるうともがいています。私の終活は第一歩から険しい氷壁に阻まれているようです。この矛盾、この哀れさ。救いを仏教に求めようとするのはお門違いでしょうか。

後日談

正月に一人で戻ってきた倅と3日間過ごしました。選暦を迎える年齢になり、もう少し腹を割った話ができるかと思いました。しかし長く離れていたせいもあるでしょう、価値観のずれはとも同居できるものではないことを痛感させられました。せめて今年大学に合格した2人目の孫が卒業して、我が家を継いでくれる日を楽しみに、もう少し頑張ろうと思っています。(院首記)

安 穩

小川良恵

「おてらの日」に寄せて

—ご判様とフェスティバルが一つに—

『法華経』という物語の世界へ

もともと内向的な性格で、小学生の頃は図書室に引きこもっていました。なかでも好きだったのはファンタジーやSFなどで、物語の世界に入り込んでしまうような子どもでした。大人になっても似たようなもので、よく「休みの日は何をしていますか？」と聞かれますが、最近はおつばら動画配信サービスで映画ばかり見えています。『更級日記』の作者である菅原孝標女は、夜を徹して物語に夢中になるあまり、夢に出てきた僧侶に「法華経五の巻を、とく習へ（すぐに学びなさい）」とたしなめられたそうですが、千年近く前に生きた人々も今の私たちと変わらないのだなと、くすりとしてしまいます。

さて、そんなふうにならざるにさせる物語ですが、『法華経』も物語形式で書かれています。仏様が説法を始めるシーンから始まり、これまでに「誌上法話」でご紹介した法華七諭などが織り交ぜられ、教えが語られていきます。日蓮聖人は、法華経に登場する「地涌の菩薩」に自らを重ね合わせて、地涌の菩薩のように、法華経を弘めることは自らの使命であるとの自覚をなされました。物語の登場人物に感情移入をして、これをしよう、この道に進もうと決心をした経験は、皆さんも多かれ少なかれあるのではないのでしょうか。さて、最近、問題解決の方法として「ナラティブ・アプローチ」が注目されているそうです。ナラティブは、物語と翻訳されます。

「妙光寺の歴史」という物語

ナレーションと語源を同じくしており、ストーリーよりも、「語ること」に重点が置かれる言葉だそうです。まだ定義が曖昧でもあり、正確な理解は難しいのですが、私は一つの解釈として、法華経を自らに照らし合わせて読むことと考えています。

「ご判様」とは、

妙光寺では、毎年4月29日に「ご判様」の行事を行ってきました。「ご判」とは、印鑑のことです。日蓮聖人が遠藤正遠という武士に送ったものです。遠藤氏は元々鎌倉幕府の役人で、流罪の日蓮聖人の見張り兼護衛でした。佐渡島で信者となつて仕えてくれた遠藤氏との別れの時、いづれ仏様の世界(霊山)で再会しようという約束の証として、手紙と印鑑が贈られました。この2つを遠藤家の子孫が代々大切に守り、年に一度、「ご判様」の日に妙光寺で御開帳をしてきました。江戸時代から行われてきた行事です。最盛期には境内を埋め尽くすほどの参拝客が訪れたそうです。自分たちだけではなく、皆さんにも日蓮聖人とのご縁を結んで欲しいという願いもあつたのでしょうか。歴代の妙光寺の住職には、遠藤家出身の方が何人もおられます。「ご判」は「霊山契約之印」ともいわれます。霊山とはお釈迦様がはじめて仏教の教えを説かれた、靈鷲山のことですが、一方で日蓮聖人が晩年を過ごされた身延山を指すこともあります。「臺をば身延山に立てさせ給へ、未来際までも心は身延山に住む可く候」「日蓮が

弟子檀那等は此山を本として参るべし、此則ち霊山の契なり」と御遺文にあるように、日蓮聖人にとつては、身延山もまた仏教の教えを説くための大切な場だったのでしよう。昔は「ご判様」を求めてお参りにくる方の中には、東北の方が多かったそうです。山梨県の身延山はあまりにも遠く、行くことのできない人々にとつて、妙光寺は自分たちにとっての身延山であり霊山であるという考えがあつたとする説もあります。法華経に説かれる物語は、一見荒唐無稽だつたり、現在の我々からすると価値観が分かりづらいこともあります。しかしながら、霊山をけして遙か遠いインドのことだと思わず、身近な場所になぞらえて、思いを深めていくこと——「法華経を手本とした自分の物語を生きていること」が、私のナラティブ・アプローチです。

今年5月の「おてらの日」開山会へ

「ご判様」の行事は、今年から日付を改め5月最後の土曜日(27日)に「おてらの日・妙光寺開山会」として開催します。今まで「送り盆」「フェスティバル安穩」として8月に賑やかに行ってきた行事の一部を、「ご判様」と一つにしていくことにしました。(送り盆は法要と灯籠を中心に8月に行います)新緑の5月にお参りいただき、「この世を安穩に」と願う仏様の教えを体感していただきたいというのが一番の願いです。皆さん、ぜひお参りください。

◆山側墓地移転、安穩廟増設工事

暮れの大雪により倒木、落石、土砂崩落が発生し、墓石の倒壊害がありました。移転計画は順調に進行しています。雪が少ないので墓石の仮閉眼法要を行い、2月から順次解体作業に着手しています。同時に池の上安穩廟最終増設工事が3月の準備作業から始まります。十分な安全配慮を行います、お参りの際にはご注意ください。



◆冬から春へ

ここ数年大雪で、大滝総代さんから農作業用トラクターで境内の除雪を奉仕いただいています。今年は少雪で除雪の機会もなく、春の訪れが殊のほか早いようです。池の脇の河津桜も、根元の福寿草も2月には開花。古墳周辺の雪割草も3月末に見頃か、終わるかもしれません。

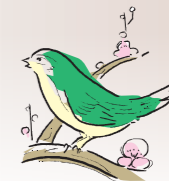


◆厄除け祈願祭 2月4日、5日

厄年にあたる方をはじめ、各種ご祈願を希望された方への「加持祈禱」による法要を行いました。お申込み83件、当日は幅広い年代で48名の参加があり、法要後にお札と記念のお菓子をお持ち帰りになりました。



寺のうごき



◆大晦日・除夜の鐘 2022年12月31日

雨の大晦日でした。コロナ禍以前ほどではないものの、この3年間では一番多い150名が除夜の鐘を撞きました。鐘撞きを終えて恒例の福引きは、小さなお子さんから高齢者まで人気でした。



◆角田地区お経会 1月22日

地元の角田浜地区檀徒さん新年恒例お経会を開催。お経の読み方をはじめ、法要中に行う「散華」の練習もありました。終了後、コロナ禍で3年間休止した新年会が和やかでした。



◆正月・お年始参り 1月1、2日

穏やかな日和の元旦、家族そろって新年の初詣、ご挨拶に来られる方々で賑わいました。飲食の振る舞いができないため、お抹茶の席で寛いでいただきました。



鼓童の舞姫が

妙光寺岩屋で七面天女に

今春、妙光寺では新たな行事「開山会」が行われます。

妙光寺の由緒には、岩屋に住む七頭一尾の大蛇を日蓮聖人が教化なさったところ、

その大蛇が七面天女（七面大明神）になったという出来事が記されています。

その物語にちなみ、5月27日⑤「開山会」では、「鼓童」の小島千絵子さんに、

岩屋で奉納舞をしていただくことになりました。

岩坂富美子さんのシンセサイザーと陶芸家・中野亘さんの古代笛がコラボします。

小島さんに、表現にかける思いをうかがいました。



小島千絵子さん

太鼓芸能集団「鼓童」名誉団員。「鼓童」創設メンバーで、太鼓中心の舞台の中で独自の舞踊の世界を切り拓き、世界を舞台に、舞と太鼓のソロ活動を展開している。日本を代表する女性芸能者である。2013年3月の「妙光寺開創七百年身延山大法要」では久遠寺本堂で奉納舞を披露していただいた。

Q 小島さんの妙光寺との縁を聞かせてください。

小島 陶芸家の中野さんのご縁です。中野亘さんが初めて妙光寺で個展をなさったときに、院庭でコンサートをしようという事になって中野さんの土笛にあわせて踊りました。それが初めての妙光寺訪問です。2002年ですから、20年前になります。

Q 中野亘さんは、陶芸家であるだけでなく、実は音楽家なんですね。中野さんと小島さんは、どこで出会ったんですか？

小島 それはもちろん、すごく悔しかったですよ。それまでは「男か、女か」ということを意識したことがなかったのですが、「えー私って女なんだ」と思いました。でも今では考えられないのですが、あの頃はもやもやしたけれども、「太鼓は女でバチは男だ」なんて言われると「そんなのかもしれない」という気持ちもあって結局舞踊をやることになったんですね。もちろん練習では太鼓も叩きましたが、舞台上で叩くことはありませんでした。

Q 「女性は太鼓を叩けない」という方針に反発しなかつたんですか？

小島 それはもちろん、すごく悔しかったですよ。それまでは「男か、女か」ということを意識したことがなかったのですが、「えー私って女なんだ」と思いました。でも今では考えられないのですが、あの頃はもやもやしたけれども、「太鼓は女でバチは男だ」なんて言われると「そんなのかもしれない」という気持ちもあって結局舞踊をやることになったんですね。もちろん練習では太鼓も叩きましたが、舞台上で叩くことはありませんでした。

Q 1981年に「鼓童」を結成しました。「鼓童」でも小島さんは舞踊で活躍されてきましたね。

小島 「鼓童」では女性も太鼓を叩けるようになりました。最初は「鼓童」創設メンバーの中で、女性は私1人だったんです。孤独感もあって辛かったですね。だけど日本の芸能は太鼓だけではないし、私が抜けたら男性の太鼓だけの「鼓童」

小島 中野さんは笛だけでなく、不思議な楽器を叩いたり、いろいろな演奏をする音楽家です。90年代の終わりに、共通の友人に誘われて発表会に参加したんです。その時に、初対面の中野さんの即興の演奏に合わせて、私が即興で踊りました。それが不思議なくらい息があっただんです。それから年に数回、中野さんの演奏に合わせて即興で踊っています。中野さんは私にとっては、即興で踊りたい気持ちをお納めしてくれるパートナーですね。5月の「開山会」でのコラボも、とても楽しみです。

Q 中野さんは笛だけでなく、不思議な楽器を叩いたり、いろいろな演奏をする音楽家です。90年代の終わりに、共通の友人に誘われて発表会に参加したんです。その時に、初対面の中野さんの即興の演奏に合わせて、私が即興で踊りました。それが不思議なくらい息があっただんです。それから年に数回、中野さんの演奏に合わせて即興で踊っています。中野さんは私にとっては、即興で踊りたい気持ちをお納めしてくれるパートナーですね。5月の「開山会」でのコラボも、とても楽しみです。

Q 今ではあちこちで、女性が和太鼓を叩いていますね。小島さんは日本だけでなく世界中に和太鼓のグループがあつて、女性が活躍しています。「鼓童」も3分の1が女性メンバーで、本当に平等になりました。1999年にロサンゼルスで、女性3人のユニット「花結」の演奏をしました。踊りと太鼓を組み合わせた内容で、太鼓をやりたいのになかなかできなかった私の自己史を込めた演奏でした。でも最後に、お客様が総立ちになって拍手してくださいました。女性をおおらかに表現することを理解していただけた、と思つて本当に嬉しかったです。あの演奏から自分の表現活動に自信が持てるようになりました。今も「花結」の活動は続いています。

Q 女性である私にも「鼓童」のイメージがあります。女性に不利な面はありませんか？

小島 確かに力は男性には劣ると思いま

Q 小島さんが芸能の道に入るようになったきっかけは？

小島 70年代に、「鼓童」の前身にあたる「鬼太鼓座」という和太鼓グループができたんです。全国でも初期の和太鼓グループでした。私は公演を見に行つて夢中になりました。「鬼太鼓座」のグループ（追っかけ）をしていました。会社員だったんですが、休みはすべて「鬼太鼓座」公演でした。同世代の人たちがむしやりに太鼓を叩いている。その目線に惹かれたんです。それで、「この人たちが何を目指しているのか知るには中に入るしか

Q 「男性は太鼓、女性は舞踊」という状態の中で、小島さんはどんなふうにも踊る身につけたんですか？

小島 私の舞踊は決まった師匠から学んだものではありません。だから「型」というものがないんです。いろいろと紹介してもらつて、あちこちの地方の郷土芸能を習いに行きました。民衆の中の芸能、土の上の生活の中で生まれた舞踊、本当に土着の芸能です。私の舞踊は、その中で感じるままに創つてきたものです。

Q 民衆の中の芸能が、小島さんの原点なんですね。

小島 日本で最初の芸能は『古事記』に出てくる天岩戸の話だそうです。岩戸の前でアメノウズメが踊つたという、岩戸の

Q 「鼓童」といえば和太鼓ですが、小島さんが舞踊をやることになつたのはなぜですか？

小島 その頃の「鬼太鼓座」では、男性しか舞台上で太鼓を叩けなかつたんです。今では考えられないことですが、そもそも全国を見渡しても女性の叩き手はいませんでした。「鬼太鼓座」のリーダーも「太

Q 「開山会」での奉納舞では、七面天女になつてくださるとか。

小島 「鼓童」の公演では事前に決まつたとおりに踊りますが、私の舞踊はストーリーだけがあつて即興で踊る場合が多いんです。即興はその場で感じたことがすぐにやれるので、非常にフレッシュに踊ることができます。岩屋の下見もさせていたでいて、少しずつイメージがくつきりしてきました。即興の踊りには、人物おろしが必要なんです。七面天女のことをもっと勉強して、当日岩屋で感じたことを精一杯表現したいと思っています。

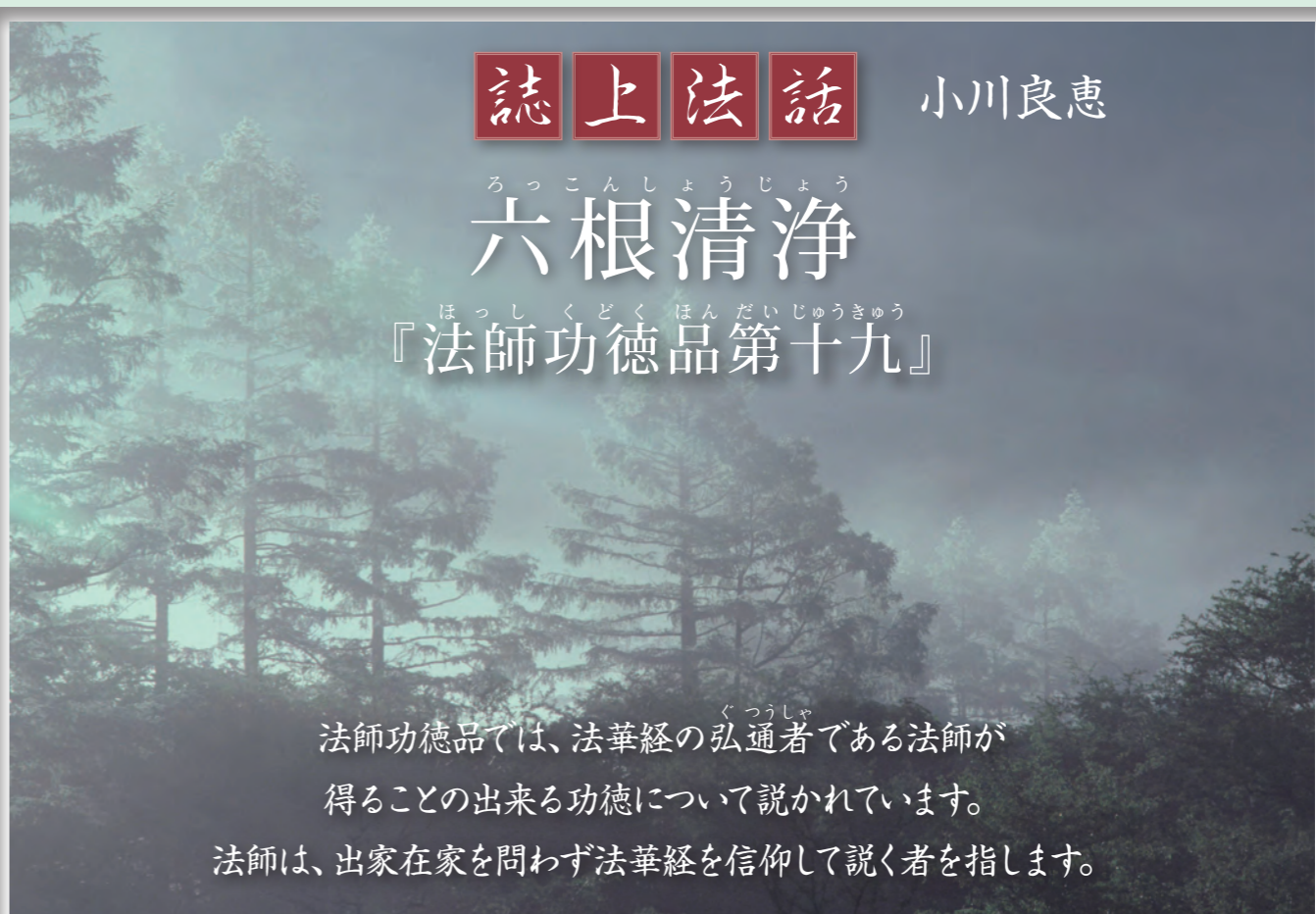
Q 七面天女の舞が楽しみです。ありがとうございます。

（聴いた人・編集部 新倉理恵子）

※入場券は郵送の方は同封はがきで、世話人のいる地区は直接世話人にお申し込みいただけます。

六根清浄

『法師功德品第十九』



法師功德品では、法華經の弘通者である法師が
得ることの出来る功德について説かれています。
法師は、出家在家を問わず法華經を信仰して説く者を指します。

五行で得られる〴〵六根清浄、

「弘通」とは、仏様の教えを弘めるという意味です。この章では、「受持・読・誦・解説・書写」の五つの修行を成すことで、法師は〴〵六根清浄、の状態になると語られています。皆さんも、六根清浄は聞いたことがあるのではないのでしょうか。六根は、人間の持つ視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感と、それを認識する心を合わせた六つの器官です。そして、その穢れが払われた状態を〴〵六根清浄、というのです。

眼・耳・鼻・舌・身体（肌）・心

〴〵六根清浄、によって得られる功德とは、どのようなものなのでしょうか。具体的には、眼は地獄の底から天上の風景、そこに生きるあらゆる生命、彼らの未来までも見ることが出来る。耳はそれらの全ての音や声を混乱せず、聴き分けることが出来る。鼻は世界のありとあらゆる花や草や木の香り、人間や神仏から発せられる香りを嗅ぎ分け、今どのような状態

にあるかを知ることが出来る。舌はどのような食べ物も、口に入れてだけで美味しくなり、不味いものがなくなってしまう。また、その舌を使って発した声は人々の心を震わせ魅了する美声になる。身体（肌）は清らかな瑠璃のように、誰もが一目見たいと望む姿になる。心は完璧に清められて、一偈一句の教えを聞いただけでも全ての意味を理解して、他者に分かりやすく説くことが出来る。

五行は化他のための修行

……というのが法師の得られる功德だというのです。非常に超人的な力です。現代に生きる我々にはにわかには信じられないような状態でもあります。しかし、法師の修行とはそれだけ大切に成就させることは難しいからこそ、こうした目標が必要だったと考えることも出来ます。「受持・読・誦・解説・書写」の五つは自分の修行であると同時に、化他——つまり他人のための修行です。人に法華經を伝えることは、何よりも重要であり難しいということがここでは説かれているのです。



角田山妙光寺インフォメーション ①



お寺の職員態勢が変わります

常勤僧侶退任・非常勤僧侶を拡充

丸3年間境内の離れに住み込みで勤務した菊池上人が、予定の期間を終えて郷里大分市の父親のお寺に戻ります。ちょうどコロナ禍に重なり大変な中、頑張っていたいただきました。

ところが昨今は僧侶志願者が減少し、規模の大きなお寺はどこも人手不足です。ことに地方寺院の妙光寺では後任が見つかりません。



田村上人



鎌田上人



小田上人



遠山上人

4月からは、鎌田義明上人（長岡市法華寺）、田村圭亮上人（新潟市中央区・法雲院）、遠山浄心上人（新潟市西蒲区・法華宗遍照寺）、小田泰智上人（長岡市和光寺）の4人が、毎日交代で勤務する体制としました。主に月回向参り、墓前読経、行事準備等を担当します。
住み込みで可能だった柔軟な対応も、今は困難です。これまで葬儀、法事は住職と脇の僧侶の2人で法要をお勤めしてきましたが、コロナ禍以降参列者が少なくなっ

たこともあり、今後は原則として住職1人とします。施主のご希望があれば、調整のうえ脇の僧侶を増やしての法要もお受けします。
また非常勤僧侶は皆さんが住職のため、お盆やお彼岸等の出勤が叶いません。対応策はそのおりにお知らせします。皆様のご理解とご協力をお願いします。

寺務職員の増員

お寺は365日24時間体制です。そのため非常勤僧侶だけでは連絡体制が心許なく、また最近事務作業量が増えて寺務職員2人では休みも取りにくいいため、新たに専従事務職員に菊池崇子さん（新潟市中央区）を採用します。

菊池さんは良恵住職と高校が同級生という縁から、家族で安穩檀徒です。これまで県内外の販売系、福祉系の事業所実務経験と社会福祉の勉強もしています。
宜しくお願ひします。



菊池崇子さん

墓地移転、安穩廟増設着工へ



境内鳥瞰図

土砂崩落による山側墓地の移転と池の上安穩廟の増設工事は、保健所による許可の予定が立ちました。雪もないので墓石の解体を2月から着工し、お盆前の7月末完成します。池の上の安穩廟も同様の予定で、パレットも全面改定しました。画家の手による古墳も見える境内鳥瞰図が好評です。どなたでもご希望の方に差し上げたいです。

『ご判様』『送り盆』行事が変わります

『ご判様』

750年前の文永8年、佐渡配流の日蓮聖人を警護する役目で同行した鎌倉幕府役人の遠藤正遠は、日蓮聖人から死後に「霊山浄土」での再会を約束して「ご判(印鑑)」を授かりました。この「ご判」は、後に妙光寺の隣村



戦前のご判様

五ヶ浜へ移住した遠藤家の子孫により、護り伝わりました。これを毎年4月28日妙光寺に運び、日蓮宗信者に限らずご開帳した行事が「ご判様」です。江戸時代から続き、昭和30年代までは境内に露店が立ち並び、全国からの参詣者で27日から夜通し人が溢れるなど大変な賑わいでした。15年ほど前に遠藤家当主が亡くな



近年のご判様

り、以来妙光寺に運ばれて来なくなりましたが、行事は日蓮聖人と遠藤氏の威徳を偲ぶ目的で4月29日に行っていました。しかしコロナ禍を経て継続もいよいよ難しく、善後策を相談してきました。

『妙光寺の送り盆』(旧フェスティバル安穩)

毎年夏のこの行事は1990年、前年に開設した安穩廟の告知と生前交流を兼ねた合同供養を目的に始まりました。この年はNHKで全国放映されて大反響を呼び、その後も多くの新聞、テレビで紹介されるなど、こうした催しの重要性への理解が広まりました。

以来33年が経過して参加者が高齢化しています。気候的にも参加者の熱中症が心配され、世代交代も進まない



2007年のフェスティバル安穩

なかでコロナ禍による困難な状況が続きました。そこでこの間開催方法の再検討を模索してきました。

5月27日(土) 『おてらの日 妙光寺開山会』として合わせて開催へ

以上の経緯から役員による議論を重ねて、季節の良い時期に2つを合わせた新たな行事として『おてらの日 妙光寺開山会』を行うことにしました。別紙案内状をご覧ください。「今を語り合い、共に生きる皆全が平和で幸せな安穩の世界を祈る場」を指します。具体的には歴史と伝統を

妙光寺サポーターズを募集します

ボランテラの名称で毎月15日にお堂や客殿の清掃、行事前の準備作業等をお願いしています。また夏の送り盆には比較的若い世代のスタッフに企画から準備、当日の運営までを担っていただいています。このたび常勤僧侶の不在新たな『開山会』の開催で更なる人手が必要です。

そこでお手伝いいただけるサポーターを新規に募集します。妙光寺サポーターズとして登録していただき、LINE等の連絡網でお知らせした日(休日も平日もあり)に都合がつく方に参加していただけます。お手伝い



踏まえた形に、従来の2つの行事の趣旨と要素を残しつつ、今後さらに時代の流れも受けとめて時々に変革も進めていきます。その実は、誰でも気軽ににお寺に足を運んでいただきたいが本音です。どなたでもお誘いあわせて是非ご参加ください。



会場の岩屋

遠壽院荒行堂の伝師・戸田日晨僧正による読経と修法は、文字通り身が引き締まる荘厳さがあります。戸田伝師は、2003年本堂の四菩薩像開眼法要以来20年ぶりの妙光寺来訪です。

奉納舞の小島千絵子さんは、四菩薩開眼法要で舞っていただいたから、三重塔修復完成法要、送り盆での鼓童演奏、妙光寺開創七百年身延山法要でも舞っていただきました。この度は小島さんからお申し出で実現しました。岩屋では二度と無い機会です。

『開山会』では、法要と舞と演奏、岩屋、七面天女物語

近ごろ妙光寺裏手にある岩屋が心靈スポットなどとネット上で取り上げられ、石像が盗難に遭うなど間違ったイメージが拡散しています。そこで本来の妙光寺の歴史を知っていただくために、『開山会』の一環として岩屋に伝わる伝承を現代風に表現することにしました。

特に厳寒期の厳しい修行で知られ、※入場券は郵送の方は同封はがきで、世話人のいる地区は直接世話人にお申し込みいただけます。